

# 個人蔵「二十四孝」について

塩出 貴美子

## はじめに

本稿で紹介する個人蔵「二十四孝」は、上下二冊からなる絵入りの写本である（以下、個人蔵本と称する）。内容は中国の孝子に関する二十四の逸話を集めたもので、その本文は嵯峨本「二十四孝」（以下、嵯峨本と称する）や渋川版「御伽文庫」所収の「二十四孝」（以下、御伽文庫本と称する）とほぼ同文である。ただし挿図については、嵯峨本及び御伽文庫本は二十四話それぞれに一図を挿入するのに対し、個人蔵本は二話分を一図で表す場合が多く、上下冊に各七図、合計十四図を挿入するにとどまる。

このような絵入りの写本は、中世末から近世初期にかけて盛行し、その後の版本の流行にも影響を与えたと考えられている。近代になると「奈良絵本」と通称されるようになり、主として本文を対象とした研究が進められてきたが、近年は挿図に対する関心も高まっているようである。実を言えば、筆者の関心も本文よりは挿図に向けられているのであるが、ここでは、まず個人蔵本の概要を紹介し、全文を翻刻

する。挿図については、表現上の特質や他本との比較など検討すべきことは多々あるが、紙数の都合上、稿を改めて論ずることにしたい。

なお、本作品は個人所有の絵入本及び絵巻コレクション（以下、本コレクションと称する）のうち的一件である。本コレクションの全体については別に報告書を作成するので、そちらも併せて参照されたい（注1）。

## 一 個人蔵本の概要

### (一) 書誌

個人蔵本の書誌は左記の通りである。

〔形態〕 冊子 二冊

〔装丁〕 袋綴 四目綴

〔法量〕 上下冊とも縦二十九・六センチ 横二十二・四センチ

〔表紙〕 紺紙金泥絵 上冊 藤花図 下冊 草木図

〔外題〕 なし（ただし題箋の剥離跡あり）

〔見返〕 金箔押

〔内題〕 なし

〔料紙〕 上下冊とも十六丁

〔奥書〕 なし

〔付属品〕 箱・袋・紙片

装丁を袋綴の四目綴とするのは、このような絵入りの写本では通例のことである。ただし四目綴の穴は実際には五箇所に開けられている。

綴じ糸には金糸の細い絹糸五本が用いられているが、経年の痛みにより擦り切れたところが数カ所あった。法量は縦が三十センチ近くあり、奈良絵本のなかでは大型綴本と呼ばれるサイズにあたる。

表紙（図1〜4）は、紺紙に金の切箔や砂子を撒き散らし、金泥で絵を施したもので、これもこのような絵入りの写本には多くの類例が見られる。上冊には藤花、下冊には草木と波などが描かれているが、これについては次章で述べる。外題は現状では失われているが、表紙の左上隅に題箋の剥離跡があり、本来は記されていたものと思われる。この剥離跡は肉眼では辛うじて識別できる程度であるが、赤外線写真では鮮明に捉えることができた（注2）。内題及び奥書は当初からない。見返しは金箔を押しして布目を付したもので、これも類例が多い。例えば、本稿で本文の校合に用いた九曜文庫蔵「二十四孝」も同様である（注3）。

料紙数は上下冊とも十六丁で、ともに第一丁を遊び紙とし、本文は第二丁の表から十行取りで記されている。遊び紙と本文の料紙は同質

であり、金泥下絵を施したものと無地のものが併用されているが、これについても次章で述べる。挿図は上下冊に各七図あり、いずれも半丁で完結する。本文とは異なる料紙に描かれ、半丁分の本文の料紙と前小口で貼り合わされるが、その際、本文の料紙の端を数ミリ折り返して糊代とする。なお料紙の紙質については、奈良絵本には間合紙や鳥の子紙が用いられることが多いようであるが、ここでは判断を保留しておく。

付属品は箱、袋、紙片の三点である。箱は素木の印籠蓋造で、蓋表の左上隅に「奈良繪本孝行ものかたり」とペンで記した貼紙がある。これは本作品を購入した人物の筆跡である。袋は薄地の絹製で、同じ絹による結び紐が付いている。縫い合わせて一枚にした布を三つ折りにし、その一方を袋に縫い、他方を蓋のように被せる構造で、横方向から挿入する。この箱と袋は、当初からのものかどうかは不明であるが、大きさからみて個人蔵本のために作られたものであることは疑いない。一方、紙片は「典籍棗鏡」（注4）の標題を木版刷りしたもので、個人蔵本とは何の関係もない。好事家あるいは古物商の手中にある時に、何らかの事情で混入したものと推測される。

以上のことから、個人蔵本は、このような絵入りの写本の通例の形式に則ったものであると言える。題箋が剥がれているので原題は不明であるが、本文からは嵯峨本及び御伽文庫本と同じく「二十四孝」と考えてよいであろう。なお、先述のごとく箱の蓋表の貼り紙には「孝行ものかたり」とあるが、これが何に依拠したものかは不明である。親孝行の物語なので「孝行物語」と称されることがあっても不思議で

はないが、この名称は仮名草子にも用いられているので、本稿では「二十四孝」と称することにす。

ところで、本コレクションは先述のペン書をした人物が収集したもので、絵入本十件及び絵巻六件からなる。そのうち五件は昭和二十年代後半に東京神田の弘文荘から購入したものであり、四件については、時期は不明であるが、やはり弘文荘の手を経ていることが確認できる(注5)。しかし「二十四孝」はその中には含まれていない。また、弘文荘の待買古書目にも該当する可能性がある作品は見あたらない(注6)。したがって、これは弘文荘とは別徑路で購入されたものと推測される。

## (二) 調査結果

今回の調査では、先述のごとく綴じ紐が傷んでいたため、その修理をかねてということで一旦綴じ紐を外し、その間に調査及び撮影を実施した。これにより料紙全面の撮影が可能になるとともに、綴じた状態では知り得ない情報を幾つか得ることができた。ここでは、そのうちの四点を報告する。

まず、第一点は綴じ穴についてである。四つ目綴じの穴が五つあることは先にも述べたが、これは縦の法量が大きいためと思われ、珍しいことではない。ここで注目したいのは、その綴じ穴よりも内側に別の綴じ穴があることである。上の一丁表(図14)では上辺から三・七センチと四・七センチ、下辺から三・二センチと四・二センチの四箇所に、同様に下の二丁表(図22)では上辺から三・八センチと四・八

センチ、下辺から三・一センチと四・一センチの四箇所に穴があいている。つまり上下冊とも一センチ間隔の二つ一組の穴が上辺と下辺よりにあいているのであり、これが最終の十六丁まで続く。この穴は表紙を付けるまでの下綴じの跡であり、表紙及び見返しにはない。ただし、今回綴じ紐を外したときには、既に下綴じはなかったので仕上げに際して外されたものと思われる。同様の下綴じの跡は本コレクションの他の作品でも確認されている(注7)。

第二点は表紙についてである。表紙は虫喰あるいは経年の痛みによる紺紙の欠損が目立つが、さらに糊が剥がれて見返しと離れているところもあった。特に背(綴じ側)は大きく剥がれたところがあり、綴じ紐を外したことによって、そこから内部の様子を窺うことができた。紺紙が非常に薄いものであることは表面の損傷部分からでもわかるが、表紙はこの紺紙に台紙となる厚めの紙を貼り、四周を折り返して作られる。ただし、紺紙よりも台紙の方が大きく、背以外の部分では周囲にかなりの余白が残っている。また、上下の小口では折り返しは二・三センチあるのに対し、背では五ミリ程度に押さえられている。これは綴じ穴にかからないように配慮したものと思われるが、そのためか紺紙の端も裁ち落とされており、台紙の余白部分も失われている。

さて、表紙について注目されるのは、この台紙に反古紙が使用されていることである。紺紙の損傷部分からも墨痕が垣間見えるところがあるが、内側から裏面を見ると墨で塗りつぶしたような跡もあった。このように表紙に反古紙を使用する例は、本コレクションの他の作品でも確認されており、撮影を依頼した元興寺文化財研究所の提案で赤

外線撮影を行ったところ、墨書を鮮明に写し出すことができた。これについては、本コレクションの報告書でまとめて述べることにした(注8)。

第三点は見返しについてである。見返しは、綴じた状態でも見える三辺すなわち前小口と上下の小口では、紙の端を裏側に折り返し、同様に端を折り返した状態の表紙と貼り合わされている。ところが、紐を外すことによつて見えるようになった綴じ代の部分では、表紙の端は折り返されているが、見返しは折り返さないままで表紙よりも少し控えた位置に貼り付けられている(図8)。また、見返しの金箔は紙面の端までではなく、綴じ穴を少し越えたところ、すなわち綴じた状態で見えるところまでしか押されていない。これは金箔の使用を必要最低限の範囲に留め、節約を図つたものと思われる。箔あしは肉眼では確認したが、金箔の端を見ると継ぎ目がわかる(図8に矢印で示した)。見返し四面とも縦方向は三枚継ぎになっており、中央の金箔の一边の長さは、上冊の表裏、下冊の表裏の順に一〇・三センチ、九・九センチ、一〇・三センチ、九・七センチである。このうち元来の金箔一枚分の大きさを示しているのは、中央の金箔が凸状に貼られている上冊の表紙だけであり、上冊及び下冊の裏表紙は両側の、また下冊の表紙は片側の重なり代分を引いた数値である。したがって上冊の表紙と下冊の表紙で同寸なのはおかしいようにも思われるが、元々の大きさに多少の相違があったことであろう。なお上下の小口については、表紙と見返しの糊付けが剥がれているところから中を覗いたところ、金箔は折り山から数ミリのところまでしか押されていない

かった。見返しの縦の法量は二十九・六センチであるから、一辺一〇・三センチ前後の金箔三枚で辛うじて間に合わせたようである。

第四点は挿図についてである。綴じ代の部分はどうなっているのか、これが最大の関心事であったが、全く手を抜くことなく、端まで完成画として仕上げられていた。むしろ建物や土坡、水波などは、背だけでなく前小口の側でも端を裁ち落とされている場合が多く、絵4関子書・曾参の前小口では曾参の母の領布の先まで裁ち落とされている(図9、挿図には便宜的に通し番号を付した)。さらに、綴じ代への配慮を欠いたような画面もあり、絵5王祥・老莱子の王祥の足先(図10)、また絵7董永・楊香の虎の足先(図11)は、綴じた状態では見えなくなってしまう。これらの状況は、製本に際しての裁ち落としが、絵師の想定以上に大きかったことを示している。ただし、本コレクションの他の作品を見ると、綴じ代の部分は彩色を省略したものも見受けられるので、これは作品によるようである。

さて、挿図についてもう一点注目されるのは、絵2漢文帝(図12)及び絵9王褒・郭巨(図13)の背になる側の端に界線と思われる直線が見出されたことである。前者は料紙の左下隅に約五センチほどであるが、後者は左端の上から下まで通っており、さらに雷神の黒雲の左方あたりには、ほんのわずかではあるが、この絵のものではない墨線と彩色がはみ出している。これにより、挿図は一枚ずつ切り離してから描くのではなく、界線を引いた料紙に複数枚を描き、これを切断したものであることがわかる。同様の界線は本コレクションの他の作品でも確認されており、制作工程を示す資料として興味深い(注9)。

## 二 個人蔵本の特徴

## (一) 本文

個人蔵本の本文については、本稿末に全文を掲載した。その際、嵯峨本、御伽文庫本、九曜文庫本、及び石川家本と校合した。嵯峨本は東洋文庫本（注10）を、御伽文庫本は国会図書館本（注11）を使用し、九曜文庫本は「奈良絵本絵巻集7」（注12）掲載の図版を、石川家本は「室町時代物語影印叢刊21」（注13）掲載の図版を利用した。嵯峨本と御伽文庫本は版本の冊子であるが、他二本は写本であり、九曜文庫本は冊子、石川家本は絵巻である。

まず、二十四話の順序を見ると、嵯峨本と御伽文庫本は完全に一致し、これの四番目にある孟宗を個人蔵本は二番目にもつてくる（表1参照）。個人蔵本は大舜と孟宗を一図に描いているので、これに対応した変更と見なされる。また巻末では、陸續と山谷を逆順にするが、これも陸續を田真・田広・田慶と一図にしたためである。九曜文庫本は個人蔵本とほとんど同順であるが、巻末の陸續と山谷については嵯峨本及び御伽文庫本の順序に一致する。制作時期が最も古い嵯峨本を基準に考えるならば、御伽文庫本はこれに忠実であり、九曜文庫本は一箇所、個人蔵本は二箇所に変更を加えていることになる。なお、石川家本は他四本と大きく異なるが、朱壽昌の詞と絵の間に漢文帝の詞と絵が挿入してい

表1 「二十四孝」の配列順序

	個人蔵本	嵯峨本	御伽文庫本	九曜文庫本	石川家本
大舜	1	1	1	1	1
孟宗	2			2	2
漢文帝	3			3	
丁蘭	4			4	
関子嚮	5	5	5	5	
曾參	6	6	6	6	
王祥	7	7	7	7	
老莱子	8	8	8	8	
姜詩	9	9	9	9	
唐夫人	10	10	10	10	
楊香	11	11	11	11	
董永	12	12	12	12	
黄香	13	13	13	13	13
王裒	14	14	14	14	14
郭巨	15	15	15	15	15
朱壽昌	16	16	16	16	16
劔子	17	17	17	17	
蔡順	18	18	18	18	
庾黔婁	19	19	19	19	
呉猛	20	20	20	20	
張孝・張札	21	21	21	21	
田真・田廣・田慶	22	22	22	22	
陸續	23				
山谷	24				

・登場順に各話に番号を付した。  
・個人蔵本と番号が異なる欄は網かけにした。

ることから、全体的に錯簡が生じているようである。したがって、ここでは比較の対象から除外した。

次に、各話の冒頭にある五言詩については、嵯峨本は返り点も振り仮名もないが、御伽文庫本と個人蔵本はこれを付している（注14）。その異同は校合からは省略したが、読み方が大きく異なるのは次の二箇所のみである。一つは関子嚮の三句目で、個人蔵本は「尊前留<sup>せんぜんしゅう</sup>母<sup>はは</sup>在<sup>まゐ</sup>」と読むのに対し、御伽文庫本は「尊前<sup>せんぜん</sup>留<sup>ら</sup>母<sup>はは</sup>在<sup>まゐ</sup>」と読むのである。二つ目は山谷の三句目で、個人蔵本は「汲<sup>くみ</sup>泉<sup>せん</sup>涓<sup>せん</sup>濁<sup>じやく</sup>器<sup>き</sup>」と読むのに対し、御伽文庫本は「汲<sup>くみ</sup>泉<sup>せん</sup>涓<sup>せん</sup>濁<sup>じやく</sup>器<sup>き</sup>」と読むのである。ほかは、返り点の有無はあっても読み方はほぼ同じである。なお、九曜文庫本及び石川家本は五言詩そのものを省略しており、この点で個人蔵本に先行し得ないことが明らかである。

和文の異同については、翻刻の合間に示した通りである。異同の総数は六十余であるが、このうち個人蔵本だけの異同が十二あり、その

原因は衍字、脱字、誤謬、語句の相違などである(注15)。いずれも個人蔵本側の不注意によるものとみなされるが、特に剡子の1は「剡子といふ者なるか親の望をかなへたく思ひ」という一文を抜いており、恐らく一行分を書き落としたものであるう。これらの異同からは、個人蔵本は他四本に先行し得ないという関係が見えてくる。したがって、先の結果と合わせると、個人蔵本は九曜文庫本及び石川家本とは直接的な関係を有しないと判断されるが、そのほかの異同を見ても、この関係を否定するものは見あたらない。

## 報 所 研 究 所 合 総

では、嵯峨本及び御伽文庫本との関係はどうであろうか。例えば孟宗を見ると、1は嵯峨本及び御伽文庫本にある注記を個人蔵本が省いた例であり、4は石川家本の脱字である。残る五つは御伽文庫本の異同で、少しずつ表記が変わっているものが多い。このような御伽文庫本の異同は他にも数多くあり、この点に注目すると、個人蔵本の本文は御伽文庫本よりも嵯峨本に近いものであると言える。

さて、嵯峨本の成立は慶長(一五九六—一六一五)頃とされ、現存する「二十四孝」のなかでは最も古いと考えられている(注16)。御伽文庫本については、洪川版の刊行は享保年間(七一六—一七三六)であるが、その元になったものは寛文(一六六一—一七三三)頃に刊行されたと推定されている(注17)。九曜文庫本については、中野幸一氏が解題のなかで「ほぼ寛文・延宝(一六六一—一八一八)頃」の製作と推定し(注18)、石川家本については、石川透氏が解題のなかで「江戸前期」と述べている(注19)。これらにしたがえば、嵯峨本が最も早く成立し、他三本は半世紀余り後に製作されたことになる。校合の結果

からは、やはり嵯峨本に先行性が認められるが、他三本については直接的な相互関係は想定しがたい。しかし、異同の大半は語句の微少な相違や脱字であるので、少なくともこれら三本が嵯峨本の影響下にあることは確かであろう。嵯峨本からはこのように多くの写本が派生したと想定されるが、個人蔵本もそうした展開の中で生まれた作品の一つであったと思われる。その位置付けについては、挿図の検討とともに改めて考察することにした。

## (二) 表紙

冊子本の表紙に紺紙金泥絵を用いる例は数多くあり、それらの検討も今後の絵入本研究にとっては重要な課題となるであろう。ここでは個人蔵本の表紙について、その表現の特徴を見ておくことにしたい。

個人蔵本の表紙は、紺紙に金の切箔や砂子を撒き散らし、金泥で絵を描いたもので、加飾の技法は四面とも同様である(図1—4)。まず、切箔と砂子を上辺と下辺によせて、また中央部ではいくつかの団塊状になるように撒くが、下辺よりの部分には上辺よりの部分よりもやや大きめの切箔を多用し、上中下の三箇所で趣が異なるように工夫している。また、上辺よりの部分では、そのすぐ下方に金泥の片ほかして描いた打曇風の雲と、型置きをして金砂子を蒔いた源氏雲を加え、装飾性を強める。この型置きは上冊の表と裏、また下冊の表と裏ではそれぞれ同じものが用いられているが、表裏で左右を反転することにより変化をつけている。なお、雲の切れ込みは下の方が横に広がった緩やかなものになっている。このように同一作品内で同じ型置きを使

用する例は、本コレクションの他の作品にも見られるが(注20)、それ以外にも数多くあるものと予想される。さらに言えば、型置きは繰り返し使用されるものであるから、異なる作品間で同じものが使われた可能性もあるだろう。製作の場を考える上で、今後注目してみたい点である。

次に、源氏雲より下方の部分には、金泥の片ほかしで数本の直線あるいは波線が引かれている。これは靨を表すもので、これによって重層性のある空間が形成される。すなわち中央の靨で挟まれた帯状の部分、ちよとど団塊状に金砂子が蒔かれたところと、下辺寄りの切箔が蒔かれたところが手前であり、その台間の部分はそれよりも奥である。この靨の台間を縫うようにして、上冊の表裏には藤花(図1・2・5)が、下冊の表には樹木と草(図3・6)、下冊の裏には波間に浮かぶ水草と落葉、岸辺を暗示する岩(図4・7)が描かれている。上冊の藤花は、表裏とも縦じ側から反対側に向かって蔓を伸ばしており、大まかに言えば表裏で左右対称の構成になっているが、先述の左右反転した源氏雲がそれをさらに強調しているように見える。一方、下冊の表と裏は一見無関係のように見えるが、表に描かれた樹木の葉(図6)が裏では落葉となつて波間を漂っており(図7)、図3・4のように並べてみると、それなりに一連の絵として眺めることができる。ところで、この樹木の葉を見ると、割れた葉先が扇状に広がり、葉脈が一点から放射状に出ているものがある。これは楓の葉の特徴であり、これを意匠化したものと思われる。それぞれの葉先が花弁のようなふくらみをもっているのも、それらしくないとも言えるが、流水に浮かぶ

落葉としても楓の紅葉はもつともふさわしいものであろう。そうであるならば、この上下二冊の表紙は、藤花と紅葉で春秋を表そうとしたものと考えられる(注21)。

さて、それぞれのモチーフは軽快な筆致で描きおこされ、金泥の量かしが加えられている(図5・6・7)。その表現は手慣れたものであり、金泥絵として既にパターン化されたものであることを窺わせる。また、その形態は写実的というよりも装飾的にデザイン化されたものになっており、モチーフの配置も絵画的というよりはデザイン的である。このような表現は料紙装飾に見られる草花図などに通じるものであり、その点では、表紙は挿図よりも料紙装飾の方に近い存在であると言えるだろう。そして、そこには洗練された美意識と、それを繊細に表現する確かな技量が認められる。

### (三) 料紙装飾

最後に、本文の料紙装飾を見ることにしよう。第一丁の遊び紙も含め、本文の料紙には金泥の下絵を施したもの(以下、下絵紙と称する)と無地のものが併用されている。料紙数は上下冊とも十六丁であるが、半丁の挿図各七図を含むので、本文はそれぞれ九丁と半丁七面である。そのうち、上冊では四丁と半丁六面、下冊では五丁と半丁四面が下絵紙である。全紙と半丁のものが入り交じるが、総丁数は上下とも七分になり、これは本文の料紙全体の五十六パーセントにあたる。その配置は表2に示した通りであるが、上下冊とも第一丁の遊び紙と本文冒頭にあたる第二丁に下絵紙を用いるほかは、下絵紙あるいは無地の

表2 下絵紙の配置と下絵の題材

図版	構成	表裏同	裏	表	丁
14	×	×	①草に葉1		上1
15(表)	○	○	②草花1		上2
					上3
16	○	×	③波に草1	④草1	上4
	○	×	⑤波に草1		上5
					上6
	○	○2	④草1	⑤草1	上7
					上8
17	○	○2	④草1	④草1	上9
18(表)	×	○	⑤草2		上10
					上11
	○	○3	⑥草花2	⑦草2	上12
21(表)	×	○	⑦波	⑧草2	上13
					上14
					上15
20	○	○3	⑥草花2	⑥草花2	上16
22(表)	×	×	③草に葉2		F1
19(裏)	○	○	⑤草2	⑤草2	F2
					F3
					F4
23	○	×	⑧草3	⑧草3	F5
25(裏)	○	○	⑩波に草2		F6
					F7
24	○	×	⑨草3	⑩草3	F8
26(表)	○	○	⑪草4	⑪草4	F9
					F10
					F11
27(裏)	○	○	⑫草5	⑫草5	F12
					F13
					F14
	×	○5	⑬草6	⑬草6	F15
28	×	○5	⑭草6	⑭草6	F16

- ・斜線は料紙が無地であることを示す。
- ・「表裏同」欄は、表と裏の図様がほぼ同じものに○を、そうでないものに×を付した。半丁のものについては、対になるものに同番号を付した。
- ・「構成」欄は、モチーフが上中下の三段に配置されているものに○を、そうでないものに×を付した。
- ・「図版」欄には掲載番号を記した。ただし片面のみの場合は括弧内に掲載面を示した。

の側を回避したためと考えられ、半丁に切断されても本来の表裏の位置付けが活かしていることを示唆する。ちなみに他の四組はすべて表と裏の組み合わせになっているが、このような表裏の使い分けは、実は下絵の構図に起因するものと思われる。なぜなら、下絵は当初から綴じ代を考慮し、綴じて左右の端すなわち背の側に余白を多く残す構成に

ものが一丁半を超えて続くことがないように間配られている。ただし、挿図も入り交じるので、その配置に規則性があるようには見えない。下絵の題材は草花、草、波などであるが、その表現は多様であり十三種類を数える。前から順に①から⑬の番号を付したが、そのうち挿図と背中合わせになる半丁の下絵に注目すると、同じ内容のものが二面ずつあることに気付く(表2参照)。例えば③波に草1は、上の四丁裏(図16)と五丁表に見られ、現状では見開きになっている。ところが、これを左右逆にして付き合わせると、下方の波の線が繋がることから元は一枚の料紙であったことがわかる。ただし、先述の如く小口の端は挿図側に折って糊代に用いられているので、その分の欠落を考慮する必要がある。同様に、上の七丁裏と九丁表(図17)の④草1、

十二丁裏と十六丁表(図20)の⑥草花2、下の五丁表(図23)と八丁裏(図24)の⑨草3、及び下の十五丁裏と十六丁表(図28)の⑬草6、以上四組についても、図様の一部が繋がることから元は一枚であったことがわかる。図版には一組しか掲載できなかったが、⑨草3では画面下方に描かれた田の畦道が繋がっている(図23・24)。以上のことから、半丁十面の下絵紙は元は五丁の全紙であったことが確認できる。右のことは下絵紙の使用にまったく無駄がないことを示しているが、その配置を見ると、五組のうち四組は、例えば⑥草1と②の背面というように連続して用いられている。ところが、⑥草花2は上の十二丁裏(⑤の背面)で半葉を使用した後、残りの半葉は次の十四丁裏(⑥の背面)ではなく、その次の十六丁表(⑦の背面)に宛てられている。これは裏と裏になるのを回避したためと考えられ、半丁に切断されても本来の表裏の位置付けが活かしていることを示唆する。ちなみに他の四組はすべて表と裏の組み合わせになっているが、このような表裏の使い分けは、実は下絵の構図に起因するものと思われる。なぜなら、下絵は当初から綴じ代を考慮し、綴じて左右の端すなわち背の側に余白を多く残す構成に



なっているからである。逆に、前小口の側は余白が少ないだけでなく、先述のように下絵の一部が反対側へ続いているものもあり、こちら側を敢えて緩じ代に用いることはしなかったのであろう。

では、下絵の内容を①から順に見てみよう。

①草に蝶1(図14) 丸みのある葉と直線で表した葉の根元に、数本の線あるいは金泥の片暈かしによる線を添えたモチーフを表裏に四段ずつ描く。この数本の線は、③波に草1(図16)の右下や⑥草花2(図20)の右下で水草とともに描かれている線と類似するので、水面を表すものと思われる。一方、金泥の片暈かしによる線は、このほかでは⑧草に蝶2(図22)に見られるだけであるが、ここでは地面を表すように見えるので、ここでもそう見なしておきたい。したがって、この下絵は地面と水面が入り交じる汀に生えた草を表したものと思われるが、さらに霞と思われる曲線や片暈かしの線も加えられ、裏には蝶が一匹添えられている。ただし、このような風景らしい図様は下絵のなかではむしろ例外的なものである。丸みのある葉と蝶の羽に金泥の暈かしが加えられている。

②草花1(図15) 細身の葉と曲線で表した葉に小さな花を組み合わせたモチーフを表裏に三つずつ点在させる。花は金泥の暈かしに小点を付しただけの簡略な表現である。細身の葉にも金泥の暈かしを加える。

③波に草1(図16) 大きく蛇行する曲線と円弧で表した波の上に、互生の葉を付けた枝先がのぞくモチーフを表に三つ、裏に二つ点在させる。裏は一つ少ない替わりに、右下に水面に浮かぶ水草のモチーフ

を添える。水草は円の上に数本の短い線を付しただけの簡略なもので、⑥草花2にも同じものが見られる。葉と水草に金泥の暈かしを加える。

④草1(図17) 笹のように下向きに広がる葉と大小の弧線による葉を組み合わせたモチーフを表裏に三つずつ点在させる。笹のような葉に金泥の暈かしを加える。

⑤草2(図18・19) ④草1と似ているが、笹のような葉が上向きに広がる点が異なる。このモチーフを上第十丁には四つずつ、下の第二丁には三つずつ表裏に点在させる。笹のような葉に金泥の暈かしを加える。

⑥草花2(図20) 菖蒲の根元に数本の線を添えたモチーフを表裏に二つずつ点在させ、その右下に③波に草1(図16)と同じ水草のモチーフを添える。菖蒲の根元の線は、①草に蝶1(図14)と同じく水面を表すものと思われるが、上方に引かれた線は霞とみるべきであろう。菖蒲の花弁と葉、水草に金泥の暈かしを加える。

⑦波(図21) 大きく蛇行する曲線と円弧で表した波のモチーフを表裏に四つずつ点在させる。波頭には金泥の暈かしを加え、立体感を表す。なお、下絵のなかで草を伴わないのは本図のみである。

⑧草に蝶2(図22) 曲線による葉叢のモチーフを表裏に三段ずつ描く。ただし、そのうちの一段は葉が短い。また、裏では三段がバランスよく配置されているが、表では下方に偏った構成になり、上方には二匹の蝶を加えている。葉叢の根元に引かれた金泥の片暈かしによる線は、先述の如く地面を表すものと思われるが、蝶の上下に引かれたものは霞と見るべきであろう。これらの点で、①草に蝶1と同じく

他の下絵よりは風景らしい図様になっている。葉叢の一部と蝶の羽に金泥の暈かしが加えられている。

⑨草3 (図23・24) 沢瀉の葉と直線で表した葉の根元に数本の線を添えたモチーフを表に三つ、裏に二つ点在させる。裏は一つ少ない替わりに、右下に田圃の畦道を描いており、その線が表にも続いているのは先述の通りである。葉の根元の線はやはり水面を表すものと思われるが、上方に引かれた曲線は霞であろう。沢瀉の葉と畦道に金泥の暈かしを加える。

⑩波に草2 (図25) ③波に草1 (図16) と波の表現は似ているが、草が異なる。草の葉は三日月を下向きにしたような形で、波に被さるように描かれている。このモチーフを表裏に三つずつ点在させる。葉に金泥の暈かしを加える。

⑪草4 (図26) 上へ伸びる細身の互生の葉に数本の線を添えたモチーフを表裏に三つずつ点在させる。この線はやはり水面を表すものと思われるが、上方に引かれた曲線は霞であろう。葉に金泥の暈かしを加える。

⑫草5 (図27) ⑪草4の草を風に靡かせて水面近くに倒したようなモチーフを表裏に三つずつ点在させる。ここでも上方に線が引かれているが、これは霞というよりも水面を表す線と同じように見える。葉に金泥の暈かしを加える。

⑬草6 (図28) 六弁の花のような葉と弧線による葉を組み合わせたモチーフを表裏に五つずつ点在させる。花卉のような葉に金泥の暈かしを加える。

さて、このように下絵の題材はほとんどが草花や波であるが、その形態は写実性に乏しく、むしろ装飾的にデザイン化されたモチーフとしてまとめられている。また、描写も軽快な線描に暈かしを加えるだけの簡略な表現であり、⑥草花2の菖蒲 (図20) と⑨草3の沢瀉 (図23・24) 以外は名を特定することができない。しかし、その表現は手慣れたものであり、これらのモチーフが下絵として既にパターン化されたものであることを窺わせる。

そして、その配置も定型化しており、ちようと文様を散らすような感覚で、料紙半丁の上段の右、中段の左、下段の右の三箇所にモチーフを点在させたものが多い (表2の「構成」欄参照)。そのほかでは⑤草2 (図18) と⑦波 (図21) は四箇所に、⑬草5 (図28) は五箇所になるが、やはり同様の感覚でモチーフを散らしている。これに対し、①草に蝶1 (図14) と⑧草に蝶2 (図22) は、ともに風景らしい図様を描いており、下絵のなかでは例外的な表現であるが、この二枚はともに遊び紙であることから、意識的に本文の料紙とは趣の異なるものが選ばれたのではないかと推測される。なお、⑥草花2 (図20) と⑨草3 (図23・24) は汀の菖蒲と沢瀉を描いたものであり、他よりは風景的な図様になっている。

ところで、一丁の料紙の表裏を見比べると、ほとんど同じ図様の繰り返しになっているものが多い (表2の「表裏同」欄参照)。①草に蝶1 (図14) と⑧草に蝶2 (図22) はここでも例外であるが、それ以外は③波に草1 (図16) と⑨草3 (図23・24) が異なるだけである。しかし、③波に草1は裏の右下の部分を水草に、⑨草3は同じく畦道

に入れ替えただけであり、配置は似通っている。このような表裏の一致は、個々のモチーフだけでなく、その配置も含めて、それぞれの図様が下絵としてパターン化されたものであることを示唆する。

さて、以上の下絵のうち同じものは⑤草2の二例のみであるが、それも一例は草のモチーフを表裏に三つずつ、もう一例は四つずつ散らしてあり、まったく同じではない。そう考えると十四丁の下絵紙はすべて異なる図様を表しており、その多様さに驚かされる。豪華本と呼ばれるものの中には料紙全てに下絵を施したものもあるので、それには及ばないにしても、個人蔵本の料紙装飾は、その内容においても、また表現においても上質のものであると言えるだろう。

## 結語

本稿では、個人蔵「二十四孝」の概要を紹介するとともに、本文を翻刻した。調査結果として報告した内容は、このような写本に親しんでいる方々には常識的な事柄であったかもしれないが、綴じ紐を外した状態についての情報提供になれば幸いである。また、表紙の金泥絵と本文料紙の金泥下絵については、これまであまり関心が払われていなかったように思われるので、その内容を詳しく観察した。しかし、これらはより多くの類例と比較し、さらには冊子本だけでなく、料紙装飾全体の流れの中での位置付けを考察する必要があるだろう。なお、個人蔵本の制作時期については、挿図の検討がまだであるので判断を控えるが、ちなみに石川透氏による奈良絵本の時代区分に当てはめる

ならば、「IV期 寛文頃（最盛期）一六五五―一六八五頃」に分類された作品群と最もよく類似する（注22）。

さて、「二十四孝」は中世以降、漢画の主題として取り上げられ、障屏画や扇面画として描かれた（注23）。一方、冊子本の現存最古のものには嵯峨本であり、その典拠は「全相二十四孝詩選」であると考えられている（注24）。これをさらに普及させたのが御伽文庫本であるが、そこにも漢画系「二十四孝図」の影響が及んでいるという指摘もある（注25）。本稿では個人蔵本の挿図について論じることができなかったが、このほかにも冊子本や絵巻の作例があり、それらとの比較も含めて、今後の検討課題としたい。

## 【注】

- 1 塩出貴美子・中部義隆・宮崎もも「江戸時代の絵入本及び絵巻の調査研究―新出コレクションの調査を中心として―」（平成十九―二十年科学研究所費基盤研究C成果報告書）（仮題）平成二十年三月発行予定。
- 2 注1掲載書、塩出論文参照。
- 3 中野幸一編「奈良絵本絵巻集7 釈迦一代記・二十四孝」（早稲田大学出版部、一九八八年）所収。同書の解題に「表紙は布目の金箔、見返しも同じであるが、これはもと上下二冊本の見返しの金箔を、改装合綴に際してそのまま表紙と見返しに用いたものである。」とある。
- 4 田口明良編「典籍叢書」一八―一三三年刊。
- 5 注1掲載書、塩出論文参照。
- 6 弘文荘編「弘文荘待賢古書目：for Windows」（CD-ROM版）八木書店、一九八八年。
- 7 注1掲載書、塩出論文参照。
- 8 同右。
- 9 同右。

- 10 「二十四孝 絵入 光悦本」一冊（請求番号 三―B―c―2）。なお、同書は東洋文庫編『岩崎文庫貴重書叢刊（近世編）第一巻 幸若舞曲 御伽草子』（貴重本刊行会、一九七四年）に影印が収録されている。
- 11 「御伽草子 第13冊 二十四孝」一冊（請求番号 196-23）。
- 12 注3掲載書に同じ。
- 13 石川透編『室町時代物語影印叢刊21 二十四孝』三弥井書店、二〇〇八年。
- 14 東洋文庫本は、注10掲載書では返り点及び振り仮名が付されているように見えるが、これは後世の書き入れであり、本来は白文である。
- 15 衍字は漢文帝の1及び丁蘭の3の二例、脱字は関子書の4、董水の5、郭巨の2、朱壽昌の1、劔子の1、蔡順の2及び張孝・張礼の3の七例、誤謬は関子書の2及び王夏の3の二例、語句の相違は関子書の3の一例である。
- 16 川瀬一馬「古活字版之研究 第二編」日本古書籍商協会、一九六七年。川崎博「研究資料 嵯峨本『二十四孝』の挿絵作者について（上）（下）」『國華』一一三・一一四〇号、一九九八年。
- 17 市古貞次校注『日本文学全集38 御伽草子』岩波書店、一九五八年、五頁。
- 18 注3掲載書、解題四頁。
- 19 注13掲載書、五十三頁。
- 20 注1掲載書、塩出論文参照。
- 21 藤花は晩春から初夏にかけての景物であるが、「和漢明詠集」では春の部に入れられている。
- 22 石川透編『奈良絵本・絵巻の世界 カラー版』慶應義塾大学ORC（奈良絵本）発行、二〇〇五年。
- 23 漢画系「二十四孝図」についての論考は多数あるが、ここでは多くの作品に言及した論考を二点だけ挙げておく。松尾芳樹「二十四孝図考―画中説話の採択について―」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』三四号、一九八九年。稲畑ルミ子「二十四孝図考」『奈良県立美術館紀要』八号、一九九三年。
- 24 橋本草子「『全相二十四孝詩選』と郭巨敬」『京都女子大学人文叢書』四三号、一九九五年）他。

25 寺田瑞木「江戸初期の二十四孝図―嵯峨本『二十四孝』と渋川版『御伽文庫』『二十四孝』における図像の成立関係―」『浮世絵芸術』一四七号、二〇〇四年。

【付記】

本稿は平成十九年度奈良大学研究助成「江戸時代の絵入本及び絵巻の調査研究―新出コレクションの調査を中心に―」による研究成果の一部である。なお本課題に対しては、平成十九年度日本学術振興会科学研究費基盤研究C（平成二十年度まで）、及び平成十九年度メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術振興基金研究助成を併せて受けており、本稿に掲載した図版は科研費で撮影した写真の一部である。

本稿をなすにあたり、個人蔵本所有者、東洋文庫、国立国会図書館に御高配を賜った。特に個人蔵本については、緩じ紐を外した状態で調査及び撮影の御許可をいただいた。撮影は元興寺文化財研究所に依頼し、高橋平明氏、大久保治氏のお世話になった。また本文の翻刻にあたっては、本学大学院生の巻田崇裕さん、岡本愉嗣さん、櫻田純子さん、森根涼子さんの協力を得た。記して深謝する。

個人蔵「二十四孝」翻刻

【凡例】

・改行、濁点、振り仮名は原文のままとし、句読点は適宜補った。  
 ・行頭の「2オ」は第二丁表、「2ウ」は第二丁裏を示す。以下同。  
 ・婁織本、御伽文庫本、九曜文庫本、石川家本と校合し、それぞれ「婁」「伽」「九」「石」と表記した。異同のある箇所は傍線を引いて番号を付し、各話ごとに末尾に他本の字句を示した。「ナシ」は傍線部の字句がないことを示し、本文中の※はそこに字句が挿入されることを示す（九曜文庫本及び石川家本には五言詩がないが、これについては省略した）。なお、漢字と仮名の異同、濁点の有無、振り仮名の有無、振り仮名の相違は無視した。また各話冒頭の五言詩に付された返り点及び振り仮名の異同も無視した。

【上册】

2オ

大舜 だいしゆん

隊々 たいくとしてなまなす 耕 はら 春象 はるぞう 紛々 まごころ 耘 はら 草食 くさく  
ついでにうらまほけう 嗣 ついでにうらまほけう 堯登 えうとう 三宝位 さんぼうい 孝感 かうかん 動 うご 三天心 さんてんしん

大しゆんは、いたつてかうくくなる人なり。父のなほこそうといへる。一段かたくなにして、母はかたましき人なり。おと、はおほひにおこりて、いたつらひとなり。しかれとも大舜はひたすら孝行をいたせり。有とき、れき山といふ所にかう

2ウ

さくしけるに、かれかかうくをかんして大象か来て田をたかやし、又鳥とひ來つて田の草をくさきり、かうさくのたすけをなしたるなり。さて、其時天下の御あるしをは堯王と名付たてまつる。姫君まします。あねをは熈皇と申、いもうとを女英と申侍り。堯王すなはち舜のかうくになる事をきこしめしをよはれ、御むすめを后きさきにそなへ、つゐに天下をゆつり給へり。是ひとへにかうくのふかき意よりおこれり。

孟宗 まうそう ※

3オ

涙滴 なみだ 朔風寒 しやくふうかん 蕭々 しやう々 竹數竿 ちくすうさん  
 須臾 しゆゆ 春笋出 はるすんいづ 天意報 てんいほう 平安 へいあん

まうそは、いとけなくして父におくれ、ひとりの母をやしなへり。母年老て常にやみいたはり、物の味もたびことにかはりければ、よしなき物をのそめり。冬の事なるに、竹の子をほしくおもへり。すなはち孟宗竹林にゆき、もとむれとも、雪ふかき折なれば、なとかたやすくうへき。ひとへに天道の御あはれみを頼み奉るとて、折をかけて大になきかなしみ、竹にとりつき居たり

3ウ

ける所に、俄に大地ひらけさげ、竹の子あまたおへ出侍り。おほきによるこひ、則とりてかへり、あつものにつくり、母にあたへはんへりければ、は、これをしよくして、其ま、やまひもいへて、よはひをのへたり。是偏にかうくのふかき心をかんにして、

天道より

あたへ

給へり。

1 嵯・伽一 字恭武或子恭 2 伽一 泪

3 伽一 食のあちはひ 4 石一 ナシ 5 伽一 よりそひ

6 伽一 て 7 伽一 生出侍りける

4オ

〔絵1 大舜・孟宗〕

4ウ

漢文帝

仁孝臨天下

嶽々冠百王

漢廷事賢母

湯藥必親嘗

かんのふんていは、かんのかうその御子なり。いとけなき御名をは恒とそ申侍き。母薄太后に孝

かうくなり。よろつ食事をまいらせらる、時は、先みつからきこしめしこゝろみ給へり。兄弟もあまたまし／＼けれとも、此みかと程

仁義をおこなひ、孝行なるはなかりけり。

このゆへに陳平、周勃などいひける臣下達、

5オ

王になしまいらせたり。それより漢の文帝

と申侍き。然にかうくの道は上一人より下

万民まであるへき事也とるといへとも、身に

おこなひ、心におもひ入ことは成かたきを、かたし

けなくも四百餘州の天子の御身として、かくの

ことき御ことわさはたつとかりし御心さし

とそ。さるほどに、代もゆたかに

民もやすくすみ

けるとなり。

1 嵯・伽一 孝行、九一かうく 2 伽一 入

3 伽一 万 4 嵯・石一 こときの 5 伽一 世

5ウ

〔絵2 漢文帝〕

6オ

丁蘭

刻木為父母

形容在日新

寄言諸子姪

早孝其親

ていらんは、河内の野王といふ所の人なり。十五のとし母にをくれ、なかきわかれをかなしみ、母のかたちを木像につくり、いける人につかへぬることくせり。丁蘭か妻、ある夜の事なる

6ウ

に、火を以てもくさうのおもてをこかしたれば、かさのことくにはれいて、うみちなかれたり。二日を過しぬれば、妻のかしらのかみか刀にてきりたるやうになりて落たる

ほとに、おとろひてわひことをするあひた、丁蘭もきとくにおもひ、木像を大道へうつしをき、妻に三年わひことをさせたれば、一夜

の内に雨風のをととして、もくさうはみつから内へうちへ帰る也。それよりしてかりそめの事を

も木像の気色をうか、ひたると也。かやうにしきなることの有ほとに、かうく、をなし

たるはたくひすくなき事

なるへし。

1伽一て 2嵯一おと

3嵯・伽・石一内へ、九一うちへ 4石一ナシ

7オ [絵3 丁蘭]

7ウ

閔子<sup>びんしけん</sup> 嘗<sup>じやう</sup>

閔子有<sup>びんしけん</sup>賢良<sup>けんりやう</sup> 何<sup>なん</sup>曾<sup>そう</sup>怨<sup>おん</sup>晩<sup>ばん</sup>娘<sup>ぢやう</sup>

尊<sup>そん</sup>前<sup>ぜん</sup>留<sup>りゆう</sup>母<sup>ぼ</sup> 三<sup>さん</sup>子<sup>し</sup>免<sup>めん</sup>風<sup>ふう</sup>霜<sup>そう</sup>

ひんしけんは、いとけなくして母をうしなへり。父子又妻をもとめて、二人の子をもてり。かの

8オ

つま我子をふかく愛して、ま、子をにくみ、寒き冬もあしのほをとりてきる物にいれてをき待る間、身も冷て、たえかねたるをみて、父後の妻をさらんとしければ、閔子嘗か

いふやうは、彼つまをさりたらは、三たりの子さむかるへし。今我一人寒をこらへたらは、おと

くふたりはあた、かなるへしとて、父をいさめたる故に、是をかんして継母も後

にはへたてなくいつくしみをくはへ、もとの母とおなしくなれり。た、人のよしあしはみつからの心がありと、古人のいひ侍りけるも

ことはりとそおもひ侍る。

1嵯・伽・九一ナシ 2嵯・伽・九・石一ナシ

3嵯・伽・九一きせ、石一きせ侍る

4嵯・伽・九・石一には 5伽一おとうと

6嵯一をてはへ、伽一ナシ

曾<sup>そう</sup>参<sup>さん</sup>

母指<sup>ぼしゆ</sup>織<sup>む</sup>方<sup>ま</sup>嚙<sup>か</sup> 兒<sup>こ</sup>心<sup>こころ</sup>痛<sup>いた</sup>不<sup>ず</sup>禁<sup>おん</sup>

負<sup>あ</sup>薪<sup>ま</sup>歸<sup>かへ</sup>來<sup>ら</sup>晚<sup>おそ</sup> 骨<sup>こつ</sup>肉<sup>にく</sup>至<sup>いた</sup>情<sup>じやう</sup>深<sup>ふか</sup>

8ウ そうしん、あるとき山中へたき、をとりに行侍り。母留守に居たりけるに、したしき友來り。是をもてなしたくおもへとも、そう

9才

しんは内にあらず。もとより家まとしければ、かなはず。曾参か歸れかして、みつからゆひをかめり。そうしん、山にたき、をひろひみたるか、俄にむなさはきしけるほどに、いそき家に歸りたれば、母ありすかたをつふさにかたり侍り。かくのことくゆひをかみたるか、遠にこたへたるは一段かうくにして親子の情ふかきしるし也。惣して曾参の事は人にかはりて、こゝろと心とのうへのことはいへり。

おくふかき

ことほり

あるへ

し。

9ウ

〔絵4 関子審・曾参〕

10才

王祥わうしやう

繼母人間有けいぼにんげんあり

王祥天下無わうしやうてんかになし

至いたつて今河水上いまかすいのへ

一片臥いつへんふし米摸こめも

わうしやうは、いとけなくして母をうしなへり。

父又妻をもとむ。其名を朱氏といひ侍り。繼

母のくせなれば、父子の中をあしくいひなし

10ウ

て、にくまし侍れとも、うらみとせずして、繼母にもよくかうくをいたしける。かやうの人なるほどに、本の母冬のきはめてさむきおりふし、なま魚をほしくおもひける故に、鹽府といふ所の河へ求もとにゆき侍り。されとも冬の事なれば、氷とちて魚見えす。則衣すなはちをぬきてはたかになり、氷の上にふし、魚なき事かなしみるたれば、彼氷すこしとけて、魚ふたつおとり出たり。すなはち取てかへり、母にあたへ侍り。是偏にかうくの故に、其所には毎年のふしたる形、氷の上

に有となり。

1石一ナシ

老萊子らうらいし

戲舞学けいぶがく二嬌めいご

春風動しゅんふうどう二綵衣さいい

11才

双親開しゅうしんひらくレ口笑くちわらわ

喜色満きしよくみ庭閑ていげん

老萊子は、二人の親につかへたる人なり。されはらうらいし七十にして、身にいつくしき衣

をきて、おさなきもの、かたちになり、舞

たはふれ、又親の為に給仕をするとして、

わさとけつまつきてころひ、いとけなきもの、

なくやうになきけり。此意は七十になりけ



11ウ

れは、年よりて形うるはしからざるほどに、さこそこのかたちを、親の見給は、わが子のとしよりたるをかなしくおもひ給はん事を、又親の年よりたると思はれざるやうにとのために、かやうのふるまひを

なし

たると

也。

1 伽一み 2 石一と

12オ

〔絵5 王祥・老萊子〕

12ウ

姜詩

舍側甘泉出

一朝双鯉魚

子能知事

母更孝於姑

姜詩は、母に孝行なる人也。母つねに江の水をのみたくおもひ、又なまいをの膾をほしく思へり。則姜詩妻をして六七里の道をへたてたる江の水をくましめ、又魚の膾をよくした、めてあたへ、婦夫ともに常によくつかへり。有とき姜詩が家のかたはらに、たちまちに江のことくして、水わき出、朝ことに

13オ

水中に鯉有。則これをとりにて母にあたへ侍り。かやうの不思議なる事のありけるは、ひとへに姜詩婦夫のかうくをかんして、天道よりあたへ給ふなるべし。

1 九一ナシ 2 伽一館 3 伽一館 4 嘘一は

唐夫人

孝敬崔家婦

乳レ姑 晨 盥 梳

此恩無ニ以 報一 願 得ニ子孫如一

唐夫人は、しうとめ長孫夫人年たけて、よろつ食事、齒にかなはされは、常に乳をふくめ、

13ウ

あるひはあさことに髪をけつり、其外よくつかへて、數年やしなひ侍り。有時長孫婦人わつらひつきて、このたひは死せんとおもひ、一門一家をあつめていへる事は、わかよめ唐夫人の數年の恩をほうせすして、今死せむ事のこりおほし。我か子孫此唐夫人の孝義をまねて有ならば、かならず末もはんしやうすへし、といひ侍り。かやうにしうとめにかうくなるは古今まれなるとて、人皆これを歎たりと。されは、やかてむくひて、末はんしやうするときはまもなくありたるとなり。

1 伽一ナシ 2 伽一ナシ 3 伽一ナシ 4 石一かうく

14オ 「絵6 美詩・唐夫人」

14ウ

楊香

深山逢白額 努力搏颯風  
父子俱無恙 脱身饑甲中  
楊香は、ひとりの父をもてり。あるとき父と

共に山中へ行しに、たちまちあらき虎

にあへり。楊香父の命をうしなはん事を

おそれて、虎を追ざらんとし侍りけれども、

かなはざるほどに、天の御あはれみをたのみ、

こひねかはくは我命を虎にあたへ、父をた

すけて給へと、心さしをふかくして折ければ、

15オ

さすか天もあはれとおもひ給けるにや、今

までたけきかたちにて、取りくらはんとせし

に、虎俄に尾をすへてにけしりそきければ、

父子ともに虎口のなんをまねかれ、つ、かなく

家にかへり侍となり。是偏にかうくの心さし

ふかき故に、かやうのきとくをあらはせるなるへし。

董永

父貸方香 天姫陌上迎

織網債主 孝感盡 知名

15ウ

て、常に人にやとはれ農作をし、ちんを取

て日を送たり。父さてあしもた、されは、

小車をつくり、父を乗て田のあせにおみて

養たり。あるとき父におくれ、さう礼を調

度おもひ侍れども、もとより貧ければかなは

す。されはれうそく十貫に身をうり、葬禮

をいとなみ侍り。扱かの錢主のもとへゆきけるか、

路にて一人の美女にあへり。彼人董永か妻に

なるへしとて共にゆきて、一月にかとりの

16オ

絹三百疋織て主のかたへ返しければ、主もこ

れをかんして、董永か身をゆるしたり。其

後、婦人董永に云様、我は天上の織女なり。

なんちか孝をかんして、我をくたしておひ

めをつくのはせり

とて、天へそ

あかり

ける。

1 伽ーまとしくして 2 石ー老て 3 伽ーおいて

4 伽ーナシ 5 綾・伽・九・石ー云様は

6 綾・伽・九ーなるか 7 綾・伽ーけり

16ウ 「絵7 楊香・董永」

【下冊】

2オ

黄香

冬月とうげつ温ぬる衾あふ燠あつ 夏天げつ扇あふ枕まくら涼すずめ

兒童じどう知し子し職しやく 千古せんこ一いち黄香あまのこ

黄香は安陵といふ所の人なり。九歳さいのとき母

にをくれ、父によくつかへて力をつくせり。さ

れは夏のきはめてあつきおりに、まぐらや

床とこをあふひてすゝしめて、又冬のいたつて

さむき時にはふすまのつめたき事をかなし

むて、わか身をもつてあたゝめてあたへたり。

かやうにかうくゝなるとて太守劉たうしゆ瓚くわんといひ

し人、札をたてゝ、かれかかうくゝをほめた

るほとに、それよりして

人みな黄香こそ

かうくゝ

第一の人

なりと

しり

たると

なり。

1 伽一座 2 嵯・九・石一あをいて

3オ 「絵8 黄香」

3ウ

王哀

慈母じぼ怕おそ聞き雷らい 水みづ魂たま宿す夜や臺たい

阿香あきやう時とき一いつ震しん 到いた墓はか邊たもと千せん廻くわい

わうほうは、管陰と云所の人なり。父の王儀、不

慮の事によりて、帝王より法度におこな

はれて死にけるをうらみて、一期の間、其方

へはむかふて座せさりし也。父の墓所に居

て、ひさまつき拝して、かしはの木にとりつ

きてなきかなしむほとに、涙かゝりて木

もかれたるとなり。母は平生かみなりをお

それたる人なりければ、母むなしくなれる

後にも、雷らいてんのしけるおりに、いそき母

の墓所へゆき、王哀わうはい是こゝにありとて、はかを

めぐり、生たる母に力をそへたるように、死

て後までかうくゝをなしけるをもつて、

いけるときの孝行までおしはかられて、

有かたき事ともなり。

1 九一帝王う 2 伽一礼拝 3 嵯・伽・九・石一死

4 伽一たり。かやうに

郭巨

貧乏思<sup>二</sup>供給<sup>一</sup> うづんでじをばかまはりのぞんまを  
黄金<sup>二</sup>天<sup>一</sup>所賜 くわうてんのころなまよ  
光<sup>二</sup>頼照<sup>一</sup>寒門 くわうらいてらすかんもん

4ウ

郭巨は河内と云所の人也。家貧して、母をやしなへり。妻一子を生て三歳になれり。郭巨か老母、彼孫をいつくしみ、我食事<sup>一</sup>をわけてあたへり。有とき郭巨、妻にかたる様は、まとしければ母の食事さへ心にふそくとおもひしに、其内をわけて孫に給はれは乏かるへし。これひとへに我子のありし故也。所詮なんちと夫婦たらは子は二度有へし。母は二度有へからず。とかくこの子を埋て、母をよくやしなひいたくおもふなりと婦夫いひければ、妻もさすかかなしくおもへとも、おつとのめいにたかはず。彼三歳の児を引つれて埋に行侍り。すなはち郭巨なみたを押て少ほりたれば、わうこんの釜をほり出せり。其釜にふしきの文字すはれり。其文字に云、天賜孝子郭巨、官不得奪、民不得取と云々。此こ、ろは天道より郭巨に給ほとに余人とるへからずとなり。即その釜をえてよるこひ、彼児をも埋す、共に歸り、母にいよく孝行を

つくせるとなり。

5ウ

- 1伽一ナシ 2伽一与けり、噬・九・石一あたへけり
- 3伽一ナシ 4伽一夫婦 5伽一侍る 6伽一ナシ
- 7伽一日 8伽一ナシ

6ウ

- 朱壽昌 しゅじゆうしやう
- 七歳生離母 しちさいしやうりは 參商五十年 さんしやうご
- 一朝相見一面 いちやうあひみあつめん 喜氣動皇天 きけうどうわうてん

6ウ

朱壽昌は、七歳のとき父其母をさりけり。されは其母をよくしらさりければ、此事をなげき侍れとも、つるにあはざる事五十年におよへり。あるとき壽昌官人なりといへとも、官禄をもすて、妻子をもすてといふ所へたつねにゆきけるとて、母にあはせて給へとて、みつから身より血をいたして経をかき、天道へいのりをかけて、たつねたれば、心さしのふかき故につみに尋ねあへるとなり。

- 1噬・伽・九・石一かきて

劍子 けんし  
老親思<sup>二</sup>鹿乳<sup>一</sup> らうしんしゆらく 身掛<sup>二</sup>褐毛衣<sup>一</sup> みかけくわふのころも

若不<sup>もし</sup>高<sup>たかく</sup>声<sup>こゑ</sup>語<sup>かたまり</sup> 山中<sup>さんちゆう</sup>帶<sup>おび</sup>箭<sup>や</sup>飯<sup>いひら</sup>

く思ひ

劔子は、親の為に命をすてんとしけるほとのかうくくなる人なり。其ゆへは父母老て共に兩かんをわつらひしほとに、目の薬なると鹿の乳をのそめり。劔子もとより孝なる者なれば、親の望をかなへたくおもひ、則鹿のかわをきて、あまたむらかりたる

8オ 「絵10 朱壽昌・劔子」  
蔡順<sup>さいじゆん</sup>

7オ しかの中へまきれ入待れば、獵人<sup>かり</sup>これを見て、まことの鹿そと心得て、弓にていんとしけり。其時劔子これはまことの鹿にはあらず。※いつはりて鹿のかたちとなれるとこゑをあけていひければ、かり人おとろひて其故をとへは、ありすかたをかたる。されはかうくのこゝろさしふかき

8ウ 黒<sup>くろ</sup>樞<sup>しゆ</sup>奉<sup>ほう</sup>親<sup>しん</sup>闈<sup>た</sup> 啼<sup>な</sup>劔<sup>けん</sup>淚<sup>なみだ</sup>滴<sup>たつ</sup>衣<sup>ころも</sup>  
赤<sup>せき</sup>眉<sup>まゆ</sup>知<sup>ち</sup>孝<sup>かう</sup>順<sup>じゆん</sup> 牛<sup>う</sup>米<sup>まい</sup>贈<sup>く</sup>君<sup>きみ</sup>婦<sup>めかけ</sup>

7ウ 故に矢をのかれて、かへりたり。抑人として鹿に乳をもとむればとて、いかてか得さすへきなれとも

9オ とて二色にひろひわけけるそといひければ、蔡順ひとり母をもてるか、此しゆくしたるは母にあたへ、いまたしゆくせざるは我ためなりとかたりければ、心つよき不道のものなれとも、かれか孝をかんして米二斗と牛のあし一つあたへて去けり。其米とうしのも、とを母にあたへ、又みつからも常に食すれとも、一期の間つきすし

7ウ 思ひやら

9オ ありたるとなり。是かうくのしるし也。

7ウ 孝行の

9オ 哀也。

7ウ 来て

9オ

7ウ

9オ

7ウ

9オ

7ウ

9オ

7ウ

9オ

7ウ

9オ

1 嵯・伽一世の

2 嵯・石一もの共、伽一者とも、九一ものとも

庚黔婁

9ウ

到いたつて縣未けんま旬日じゆんじつ 椿庭逢ちんていほう 疾深やまひふか  
願ねが持も身代みかた死し 北望ほくぼう啓あきら憂心ゆうしん

ゆきんろうは、なんせいの時の人なり。せんりやうといふ所の官人に成て、すなはちせんりやう

けんへいたりけるか、いまた十日にもならざる

に、忽にむなさきはきしけるほどに、父のやみ

給ふかとおもひ、官をすて、かへりければ、あんの

ことく大にやめり。黔婁みんろう醫師いしによしあし

をとひければ、るし病者の糞くそなめて

みるに、あまくにかゝらはよかるへしとかた

10オ

りければ、黔婁みんろうやすき事なりとて、なめてみければ、味あじよからさりけるほどに、死せ

む事をかなしみ、北斗のほしにいのりをかけて、身かはりに

た、む事を

いのりたると

也。

1 伽一亭 2 嵯・伽・石一糞を

3 伽・九一あじはひ

10ウ [絵 11 蔡順・庚黔婁]

11オ

呉猛

夏夜無かやにやなし帷帳いゝちやう

盜ぬす渠膏血きけつ一飽いぱう

ごまう八歳にして孝ある人なり。家まとして、よろつ心にたらさりけり。されは

夏になりけれども帷帳いゝちやうもなし。ごまう

みつからおもへり。我衣わがえをぬきて親にきせ、

わか身はあらはにして蚊かにくはせたらは、

蚊かも我身をくらひ、おやをたすけんとお

もひ、すなはちいつもよもすからはだかに

なり、わか身をかに咬かて、おやのかたへかの

ゆかぬやうにして、つかへたるとなり。いと

けなきもの、かやうのかうくはふしき

なりし事ともなり。

1 嵯・伽一恣

2 伽一呉猛は 3 嵯・伽一い

張孝 張礼

偶たま値あ縁かり林りん児のこ 代か烹は云つて三に瘦は肥う

人皆ひとみな有あり二に兄弟けい弟てい 張氏ちやうし古今ここん稀まれ

12才

張かう張れいは兄弟也。世間き、んるときに八十餘の母をやしなへり。菓をひろひにゆきたれは、一人のたえつかれたるもの

来て、張礼をころしてくらはんといへり。

張礼いふやうは、我老たる母をもてり、今日はいまた食事をまいらせざりつるほとに、すこしのいとまを給れ、母に食物を参らせ、やかてまいらん。もし此やくそくをたかへは、家に来て一そくまでをころし給へ

と云て帰る。母に食事をすゝめて、約束のことくに、かの者の所へ至りけり。兄の張孝、これを聞て、またあとよりゆきて盗人に

12ウ

いへるやうは、我は張礼より肥たるほとに食する

によかるへし、我をころして張礼をたすけよといへり。又張礼は、我はしめよりの約束なりとて、死をあらそひければ、かの無道なるものも兄弟の孝をかんにして共に死

をゆるし、かやうの兄弟古今まれなりとて、米二石塩一駄とあたへたる。是をとりてかへり、いよく

1石一ナシ 2石一ナシ

なり。

孝道をなせると

13才

〔絵12 呉猛・張孝 張礼〕

13ウ

田眞 田廣 田慶

海底紫珊瑚 群芳總不如此  
春風花滿樹 兄弟復同居

此三人は兄弟なり。親におかれて後、親の財寶を三つにわけてとれるか、庭前に紫荆樹とて枝葉さかへ、花もさき亂みたれたる木一本

有。これをも三つにわけてとるへしとて、夜もすから三人せんきしけるか、夜のすてに明ければ、木をきらんとて木のもとへいたりければ、きのふまでさかへたる木か、俄にか

14才

れたり。田眞これを見て、草木心ありて、

きりわかたむといへるをきいてかれたり。まことに人として、これをわかまへさるへしやとて、わかたすしておきたれは、又ふた、ひもとのことくさかへたるとなり。

陸續

孝悌皆天性

人間六歳兒

袖中懐二緑橘

遺レ母報ニ舎船

14ウ りくせき六歳のとき、袁術と云人の處へ  
行侍り。袁術りくせきかためにくわしに  
たちはなを出せり。りくせき是を三つ取  
て袖にいれてかへるとて、袁術に札をいた  
すとて、たもとよりおとせり。袁術これ  
をみて、りくせきのはおさなき人ににあ  
はぬことゝいひ侍りければ、あまりに見事  
なるほどに、家に歸り母にあたへむ為也  
と申侍り。袁術これをきゝて、おさなき  
心にてかやうの心つけ、古今まれなりとほ  
めたるとなり。さてこそ天下の人、かれか  
孝行なる事をしりたると也。

15オ 〔絵13 田眞 田廣 田慶・陸續〕

16ウ

山谷

貴顯聞天下 平生孝事親

汲泉涓涓器 婢妾豈無人

さんこくは宋の代の詩人なり。いまにいたつて、  
詩人の祖師といはるゝ人也。あまたつかひ人もお  
ほく、またつまもありといへとも、みつから母の大小便  
のうつはものをとりてあつかひて、けかれたる  
ときは、手つからこれをあらひて、母にあたへ、朝夕

よくつかへておこたる事なし。されは一を  
もつて万をするなれば、其ほかのかうくをし  
はかられたるとて、此人の孝義天下に  
あらはれたるとなり。このさんこくの事は、  
よの人にかはりて

名の

たかき

人なり。

1石一ナシ 2石一ナシ

16オ 〔絵14 山谷〕





図2 上冊裏表紙



図1 上冊表紙



図4 下冊裏表紙



図3 下冊表紙



図8 上冊表紙見返しの綴じ代  
(矢印は金箔の継目を示す)



図5 上冊表紙 (部分)



図6 下冊表紙 (部分)

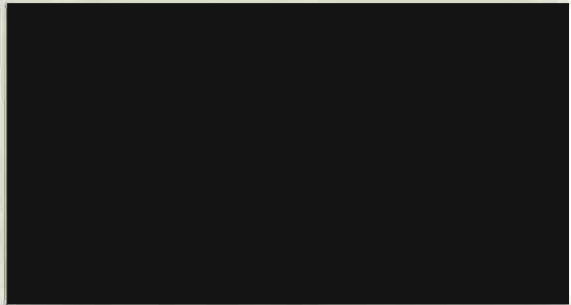


図7 下冊裏表紙 (部分)

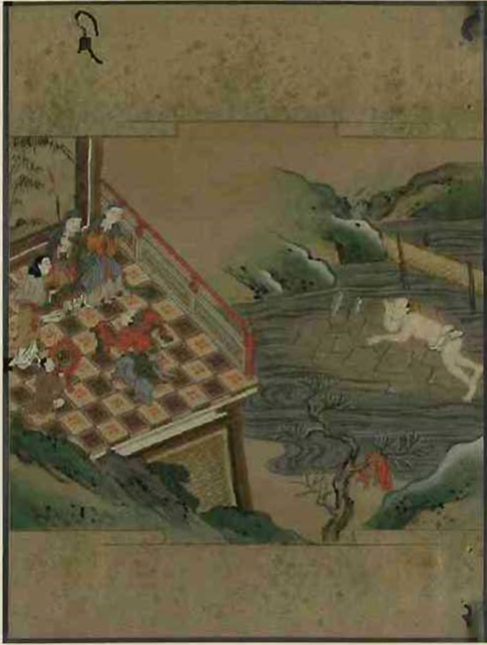


図10 絵5 王祥・老萊子（上12丁表）

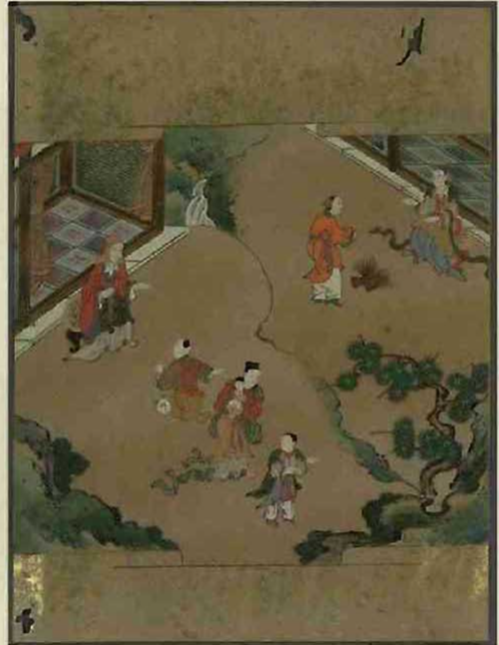


図9 絵4 閔子騫・曾參（上9丁裏）

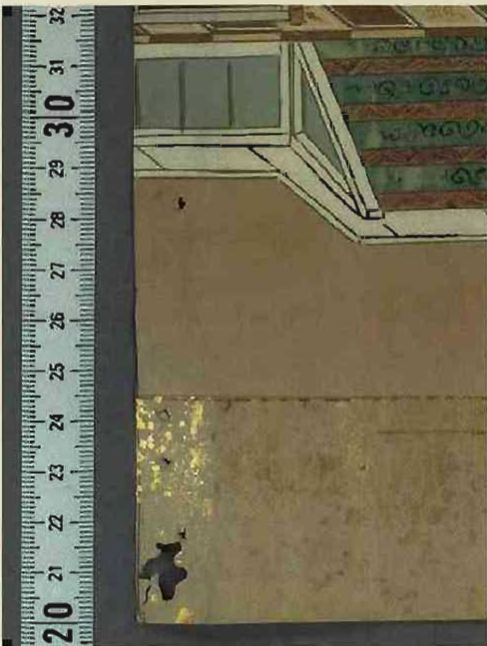


図12 絵2 漢文帝（上5丁裏）部分

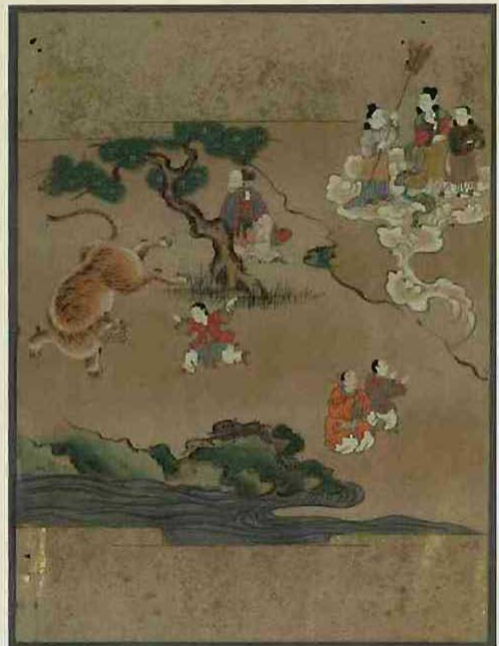


図11 絵7 董永・楊香（上16丁裏）

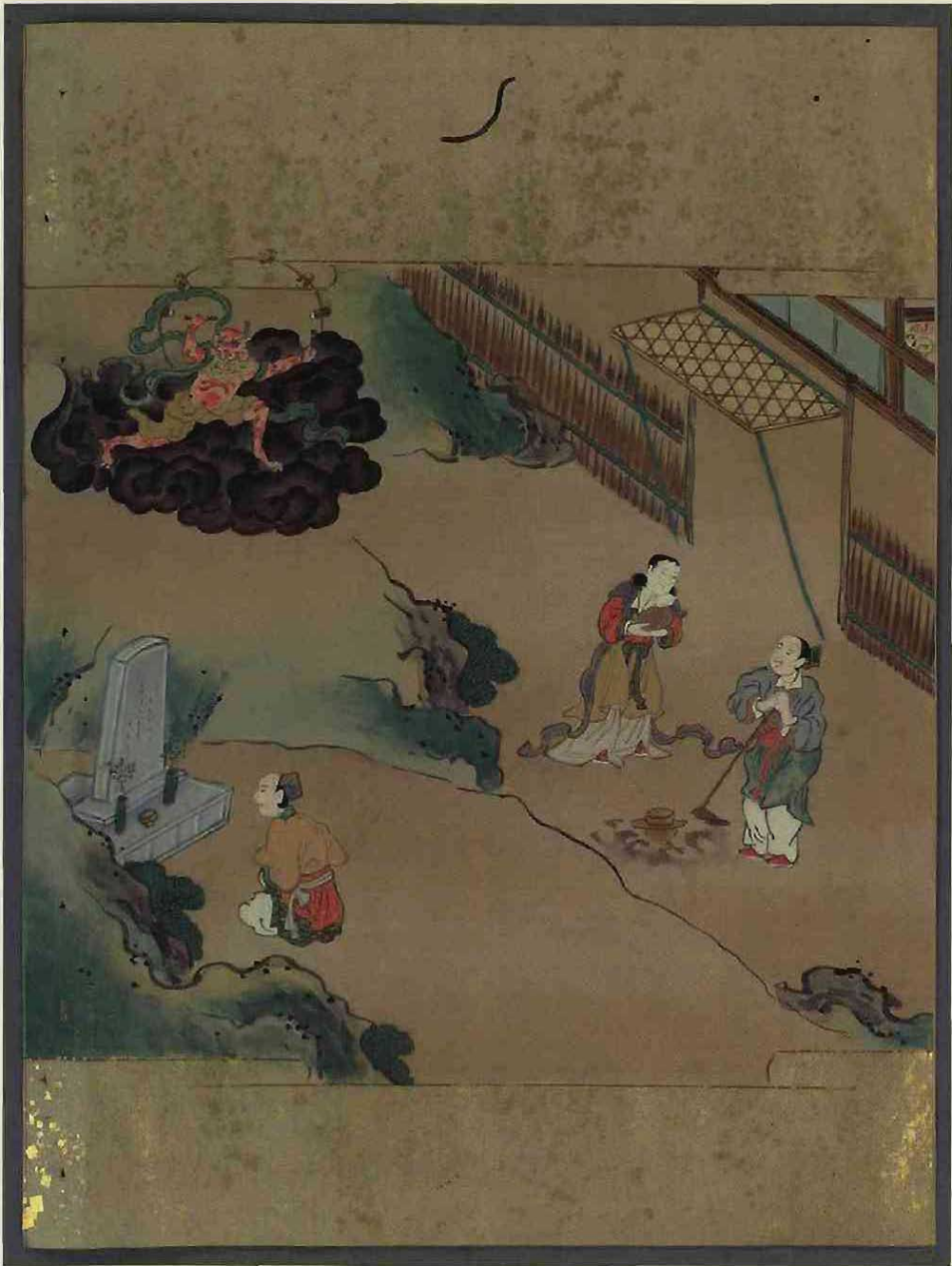


図13 絵9玉哀・郭巨（下5丁裏）

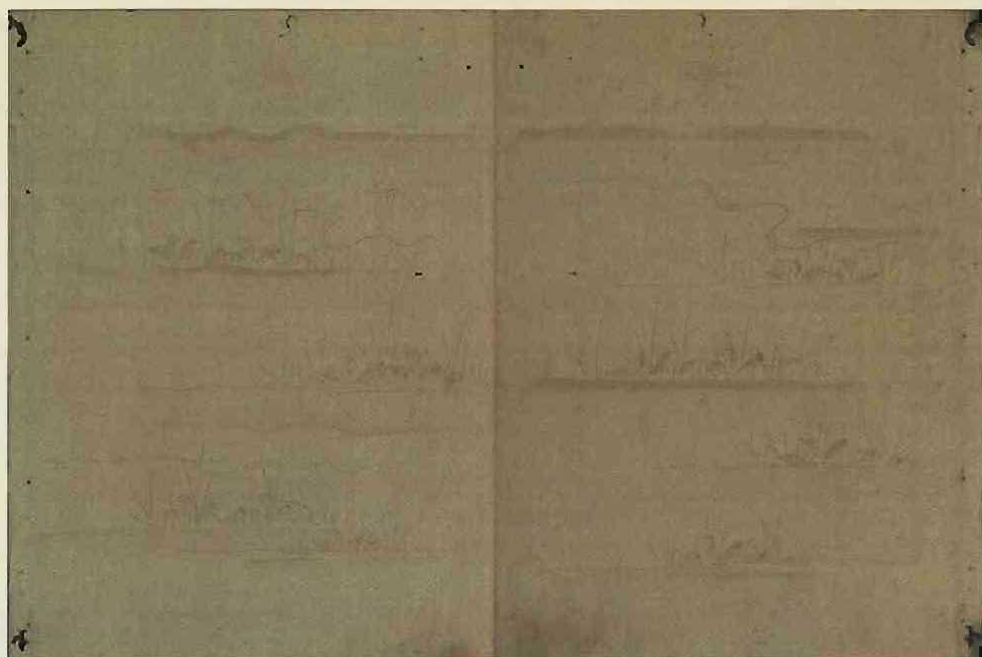


図14 ①草に蝶1（上1丁表と同裏の画像を接合）

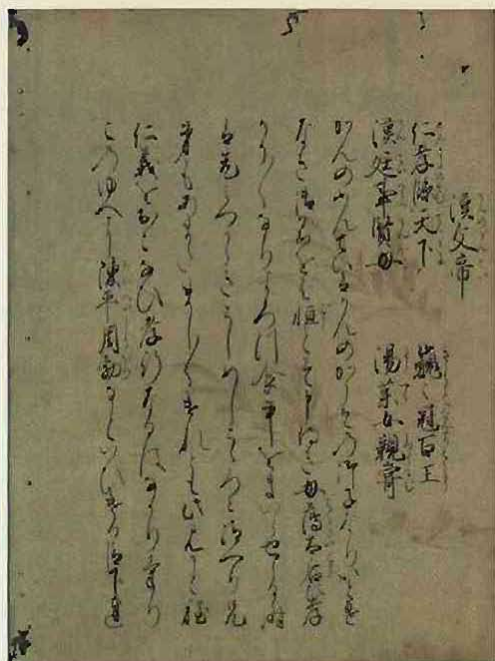


図16 ③波に草1（上4丁裏）

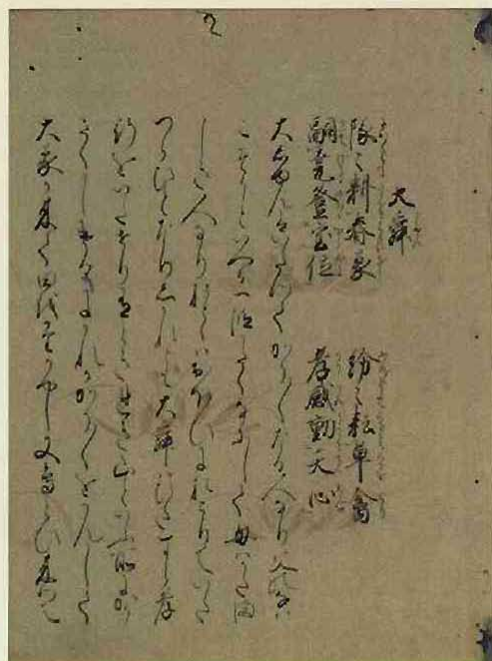


図15 ②草花1（上2丁表）

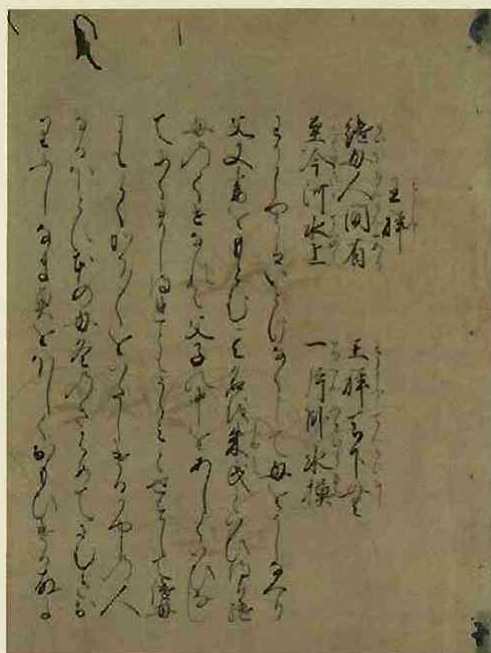


図 18 ⑤草 2 (上 10 丁表)

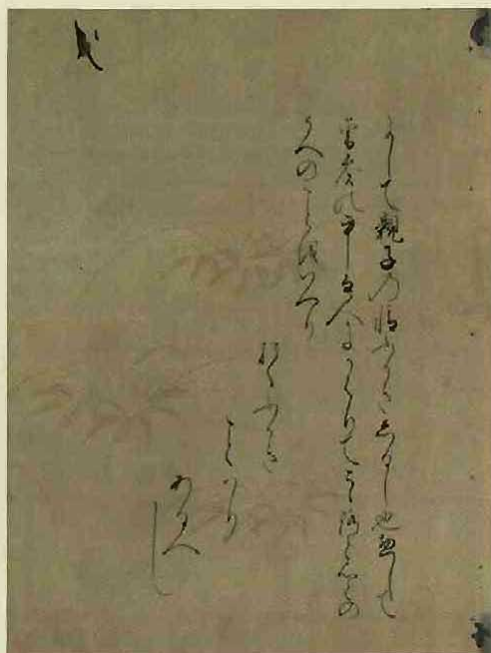


図 17 ④草 1 (上 9 丁表)

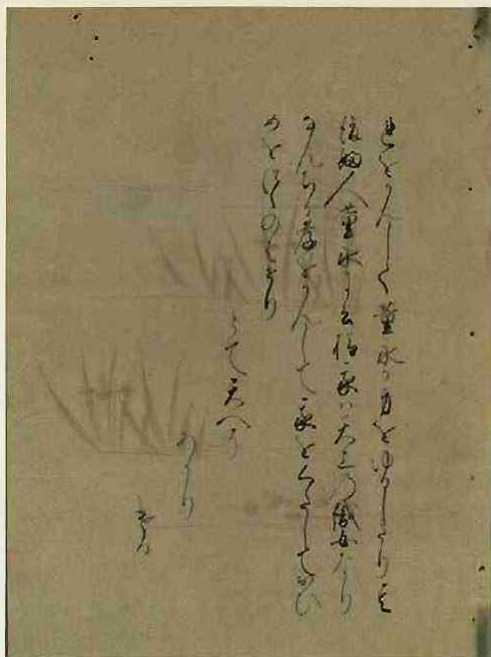


図 20 ⑥草花 2 (上 16 丁表)

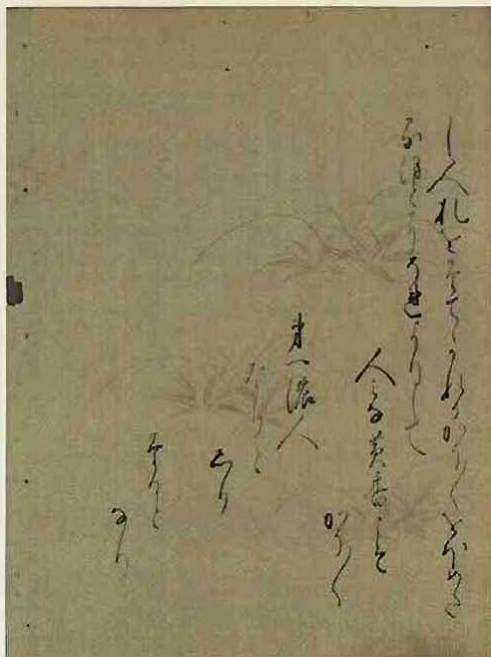


図 19 ⑤草 2 (下 2 丁裏)

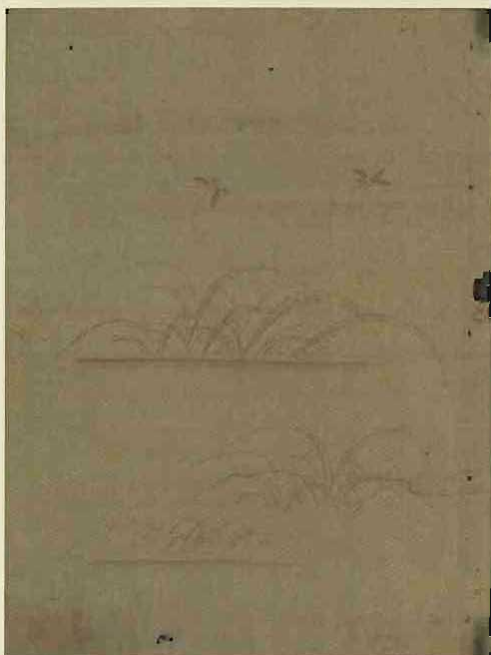


図 22 ⑧草に蝶 2 (下 1 丁表)

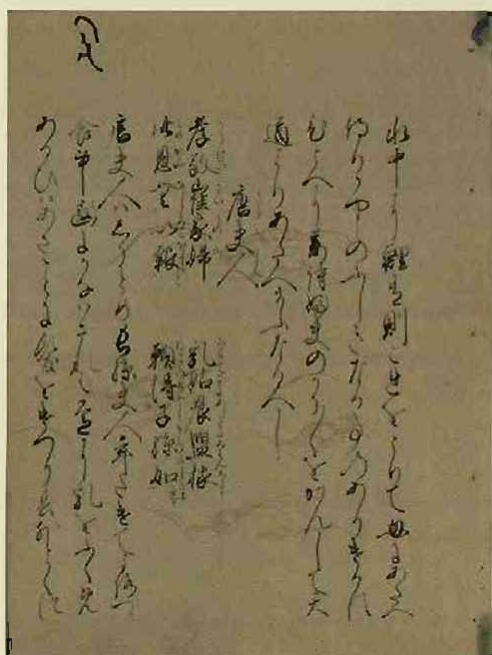


図 21 ⑦波 (上 13 丁表)

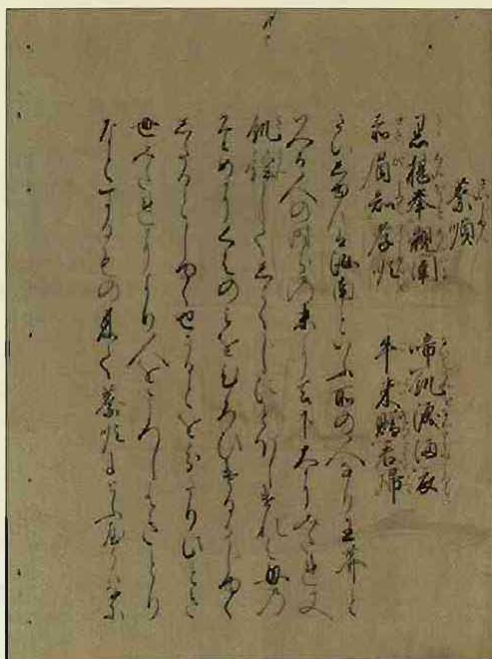


図 24 ⑨草 3 (下 8 丁裏)

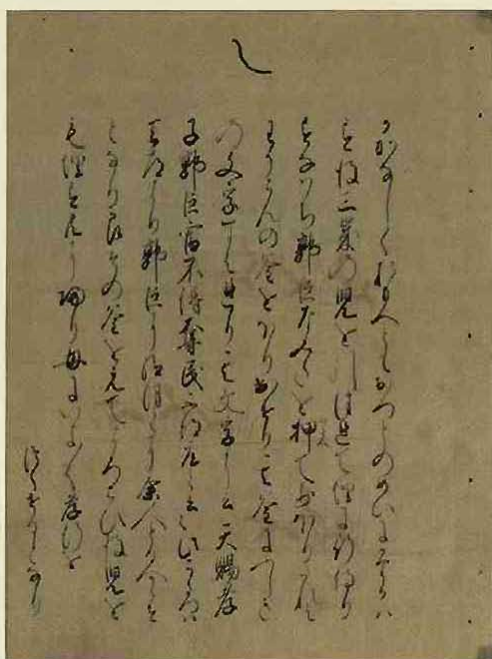


図 23 ⑨草 3 (下 5 丁表)





**On Nijūshi-kō (twenty-four paragons of filial piety)  
in Private Collection**

Kimiko Shiode

This resume presents **Nijūshi-kō**(twenty-four paragons of filial piety) in Private Collection. It is an illustrated manuscript consisting of two volumes (29.6×22.4 cm each). Such illustrated manuscripts are sometimes called by the name of **Nara-ehon** (a type of illustrated narrative book or scroll consisting mainly of short folk tales).

The book covers are made of dark-blue paper with paintings in gold, which are flowers of wisteria on the first volume, and plants on the second volume. The paintings in gold are seen also on nearly half of the writing papers, such as plants or waves. These paintings are decorative and patterned rather than realistic.

The text, a selection of twenty-four episodes on Chinese dutiful sons, is much the same as that of four other works, which belong to **Saga Books**, **Otogi Library**, **Kuyō Library**, and **Ishikawa Collection** respectively. You can see the translation into type of all the text of Private Collection version and the comparison with that of four other versions at the end of this resume.

Regarding the illustrations, there is a difference in number. While **Saga Books** version and **Otogi Library** version each includes twenty-four illustrations, **Kuyō Library** version has sixteen, and **Private Collection** version and **Ishikawa Collection** version each fourteen. The comparison of the styles of illustrations will be discussed in other treatise.

This work is one of the illustrated narrative books and handscrolls in Private Collection. The author will write another report on the whole Collection soon.